

近代中国に於ける新感覚派文学と美学の影響と受容の関係

——週刊《礼拜六》全二百期に現れる民国期の美術事情と青少年期の施蛰存を巡って

大阪大学 夏麒

はじめに：

中国現代文学の作家施蛰存（1905～2003）の青少年期の作品には、画家、芸術論、宗教、田園といった題材がしばしば見られ、これらは、作家の審美意識の形成と、青少年期に受けた芸術教育との関係性を示唆しているとされる。

青少年期の施蛰存について、徐曉紅（2009 中国語、2009、2010、2011 中国語、2011、2012、2014、2015 中国語）は、鴛鴦胡蝶派の継承と欧米作家の模倣が、彼の文壇デビュー期（つまり青少年期後半）の作風であるとしている。

今回は、施蛰存の青少年期前半の審美意識の形成について、青少年期の彼が愛読した、当時の中国で最も有名な週刊文芸誌《礼拜六》（1914～1923）の二百期を資料として、考察を行う。

本論：

- 一、土山湾画館：松江の孤児院から中国現代美術の発信源へ、中心人物：丁悚
- 二、《老画師》に現れる審美意識と丁悚が発表した『天馬会』会則の関係性
- 三、詩画同源：謝之光の美人画を巡っての詩画良縁、中心人物：周瘦鵑

まとめ：

今回は、青少年期の施蛰存が愛読した《礼拜六》にみられる美術関連の内容を基に、彼の青少年期の審美意識の形成と、実在した画家らとの接点を通して、現代中国美学の発展が現代中国新感覚派文学の発展に及ぼした影響について分析した。

西洋美については、松江県の土山湾画館の中心人物である丁悚が、《礼拜六》、『天馬会』などを媒介に、大きな影響を及ぼしたと考えられる。つまり、自然主義や人間性といった審美意識の影響を大きく受けたといえる。

東洋美については、鴛鴦胡蝶派文学の中心人物である周瘦鵑に代表される、中国古典文学の詩画同源の創作原則が大いに影響していると思われる。詩画同源の審美意識に基づき、文字と美術という二つの方法で読者に作家の美意識を伝える手法は、施蛰存の青少年期に形成されたものである。そのため施蛰存の小説作品には、宗教画、田園風景画、美人画の視角的イメージが顕著な特徴として現れるのである。